



学校だより アンケート特集号

平成30年2月

京都市立桂東小学校

校長 和田 英明

後期の児童アンケート結果です。結果の集計とそこからわかる傾向と今後の課題について、考察してみましたのでお知らせいたします。

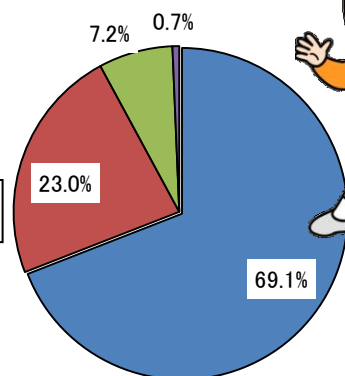
低学年・中学年・高学年と学年が進むにつれて各項目の割合はどう変わっていくかを調べました。

子どもたちのアンケート結果から（１）



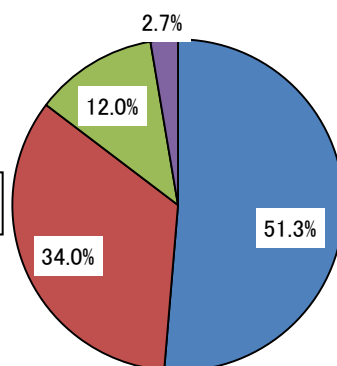
『学校はたのしいです。』

低学年

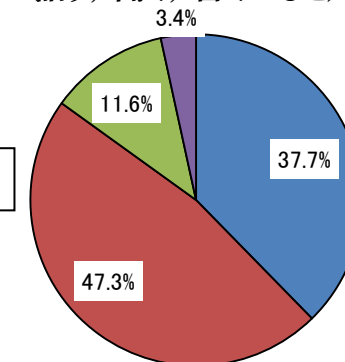


『自分の考えをしっかりと発表したり、友だちの意見をしっかりと聞いたりして、友だちと一緒に学習しています。』

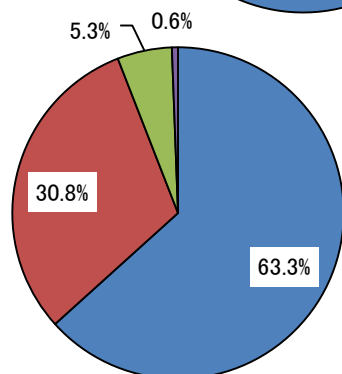
低学年



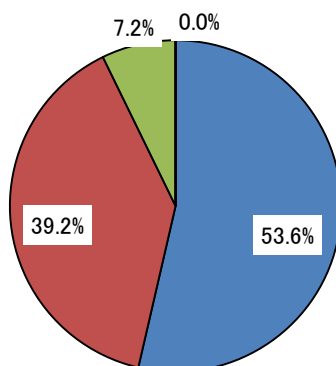
低学年



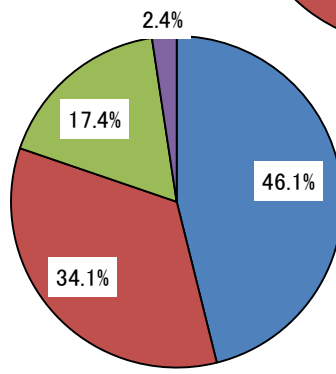
『いつもよい姿勢で学習しています。（話す、聞く、書く…など）』



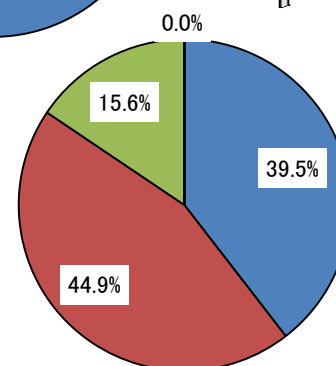
中学年



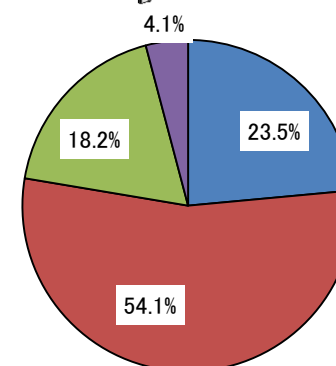
高学年



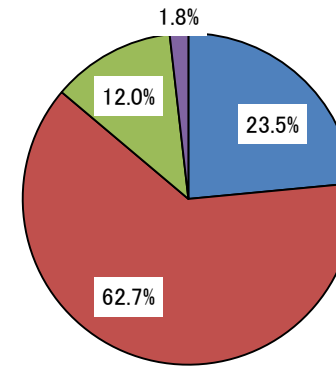
中学年



高学年



中学年



高学年

前期と比べて、“とても楽しい”“まあまあ楽しい”を合せた比率は、低学年・中学年・高学年とも前期に比べて若干低くなっていますが、結構高い数字を推移しており、うれしく思っています。

しかし、“あまり楽しくない”“楽しくない”を合せた比率は、低学年が3.1%、中学年が0.9%、高学年が3.6%、前期より否定的な回答が高くなっています。低学年と高学年が気になります。

低学年は、友だち関係のことや学習のことなどで、自分の思うようにいかないことも増えてきているように思います。また、高学年ではモチベーションを持続して主体的に取り組むことが難しくなり、学校生活に意義を見出せなくなっているように感じます。

個人差の問題です。常に子どもたちが相談しやすい雰囲気づくり努め、子どもたちの変化を見逃さないように取り組んでいきます。

前期と比べて、“よく出来ている”“大体出来ている”を合せた比率は、低学年と高学年でほぼ同じ比率であるが、中学年では、4.9%低くなっています。また、“あまり出来ていない”と“出来ていない”を合せた比率でも、中学年が前期に比べて、4.9%否定的な回答が高くなっています。

「主体的・対話的で深い学び」を目指して、子ども同士の協働的な学習を取り入れるように心がけていますが、基礎的・基本的な学習がしっかり身に付いていないと協働的な学習に主体的に参加することは難しいものです。中学年になると、学習が抽象的になり難しくなってきます。

まず、基礎的・基本的な学習を着実に身に付ける指導と、しっかり「聞く」「話す」指導に力を入れていきたいと思っています。

“よく出来ている”“大体出来ている”を合せた比率は、低学年が6.6%、中学年が2.9%、高学年が8.7%、前期より高くなっています。その分、否定的な回答も前期より少なくなっています。

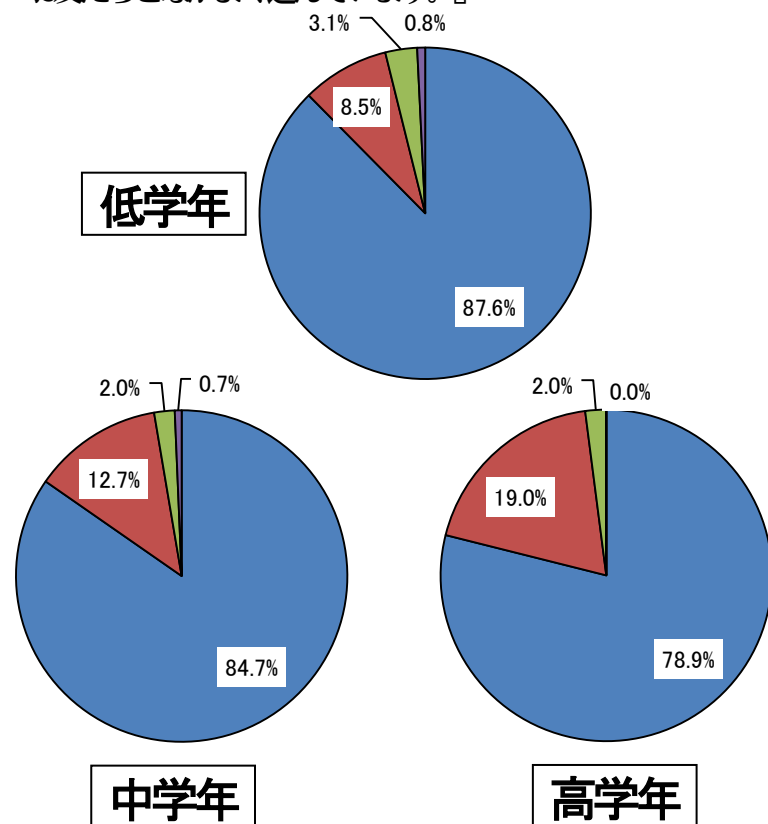
学習に向かう学級集団に育てていくには、学習に向かう子どもを育てていく必要があります。学習に向かうエネルギーや気力、モチベーションは、必ずしも学習姿勢だけではないと思いますが、重要な要素の一つであることには間違いのないと思います。基本的生活習慣との関わり、学習内容の理解との関わり、友だち関係…など、いろいろな要因があり、子どもたち個々の問題です。

いずれにしても、保護者の皆様のご協力がないと解決できない問題です。学校でも子どもたちの変化を見逃さず、個々に指導すべき内容については、は家庭と連携して取り組んでいきたいと思っています。



子どもたちのアンケート結果から（２）

『お友だちとなかよく遊んでいます。』

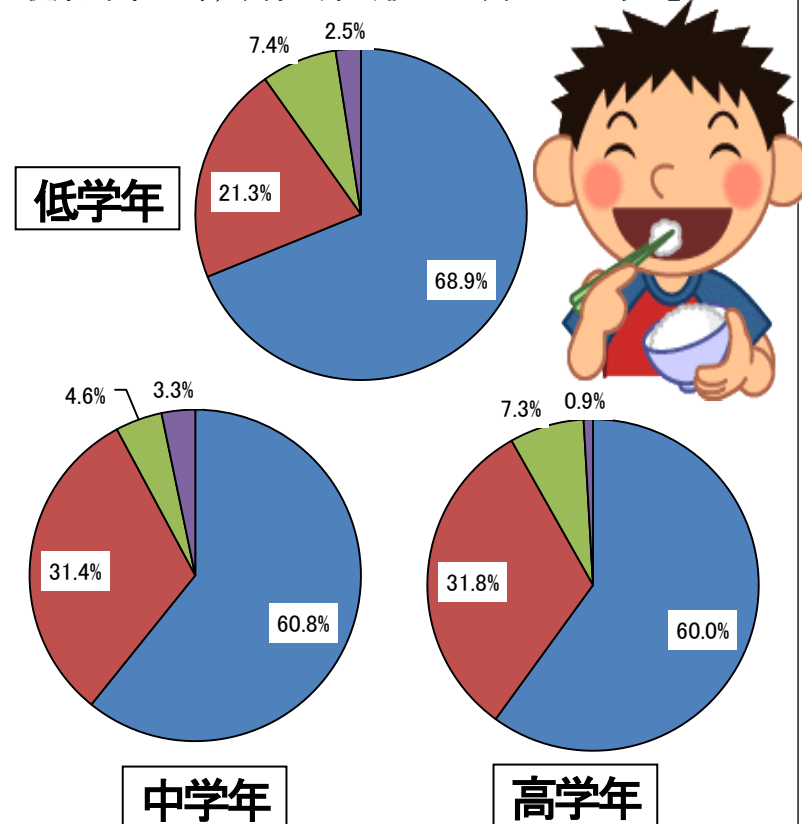


“よく出来ている”と“大体出来ている”とを合わせた肯定的な回答は、低学年96.1%、中学年97.4%、高学年97.9%とどの学年も高い比率となっており、学年の差異もほとんど見られません。“出来ていません”という否定的な回答では、高学年は0%でした。また、低学年が0.9%、中学年が0.7%、前期より低くなっております。

子どもたちにとって、学校の楽しさは友達関係に負うところも大きいようです。「学校がたまのいい」と「お友だちとなかよく遊んでいます」の質問では、“たのしくない”“出来ない”という否定的な回答が低学年も中学年もほとんど同じ比率で低く、高学年では両質問とも0%でした。この二つの内容はリンクしているようです。

低学年も学校に随分慣れ、友だち関係も広がり、そして、目まぐるしく変わっていきます。学年が上がるにつれて友だちが固定されていく傾向にあるようです。お子たちの友だち関係は、常に把握していきたいと思います。前期にも書きましたが、子どもに対しては、“手は離しても、目は離さないようにしましょう！”

『健康に気をつけ、食事好き嫌いなく食べています。』

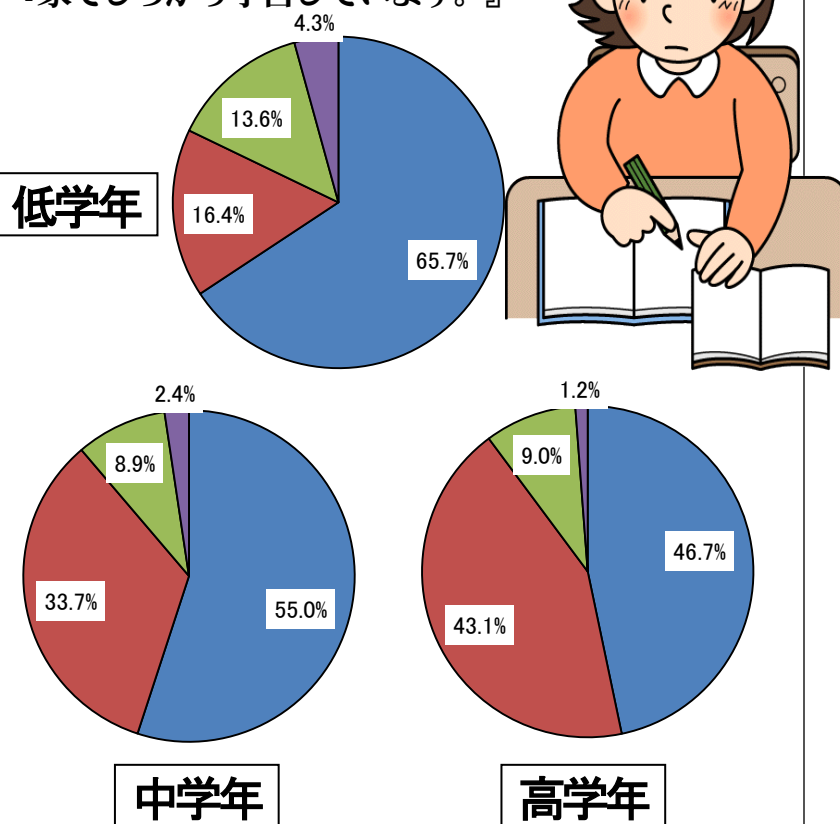


“よく出来ている”と“大体出来ている”とを合わせた肯定的な回答は、低学年90.2%、中学年92.2%、高学年91.8%という結果となっています。前期とほとんど同じ結果となっています。また、“あまり出来ていない”“出来ていない”を合わせた否定的な回答は、低学年、中学年、高学年とも、前期よりも低い比率となっています。この結果からは、全体的に安定した食生活を送っているといえるようです。

ただ、“出来ていない”が中学年と高学年は、前期より高い比率となっています。学年が上がるにつれて、保護者の皆様も子どもまかせになってしまうこともあるのではないかと思います。

そこで、「食育と学力」の関係もいろいろところで話題になっています。確かに学習に取り組む意欲や自己を律する自制心、困難に負けない続ける気力・体力、そうした学力を支える基盤をつくるのが毎日の食事だと思いますが、そんなに神経質になる必要もないと思います。ただ、進んで食べようとする気持ちを育てる食卓の場の設定には十分配慮していきたいと思います。

『家でしっかり学習しています。』



“よく出来ている”と“大体出来ている”とを合わせた肯定的な回答は、低学年が8.5%、中学年が1.9%、前期より低くなっています。また、“よく出来ている”についても、どの学年も3%~9%、前期より低くなっております。

平成30年度から大きく教育課程が変わります。道徳が教科となります。また、外国語活動の時数も増えてきます。そこで、教師から与えられた課題のみの取り組みだけに終わってはい、予測不能な時代の中で社会を切り拓くための資質・能力を育成することはできません。

新教育課程では、「主体的・対話的で深い学び」が強調されています。これをどのようにとらえるか、いろいろな考えがあると思いますが、**“主体的”**と**“家庭学習”**はつながっていると思います。

教師から課題を与えられるだけの受け身の学びではなく、自ら課題を選び、自ら解決していく主体的な学びをつくっていきたいと考えています。そこには、家庭でも自ら学習する習慣を身に付けることにあります。ご協力、よろしくお願いいたします。